

さかべつとうの浄土 じょううど  
(新潟県) にいがたけん

むかし、あるところに、魚釣りのじょうずな男がいました。

ある日のこと、男は、屋根のふきかえをしようと、村の人たちに集まつてもらいました。すると村の人たちは、

「おまえさんは、魚釣りがうまいから、きょうは屋根のふきかえはおれたちにまかせて、魚を釣つてきてごちそうしてくれないか」といいました。男は、

「それなら、屋根のほうはたのみます」といって、釣りざおをかついで川原へ出かけました。

男がいっしんに魚を釣つていると、いつのまにか、側に美しい女人人が立つていて、じつと釣りを見ていました。男が顔をあげると、女人人は、ほほえんで、  
「おまえさん、さかべつとうの浄土じょううどへ行つてみませんか」と話しかけてきました。男は、  
なにげなく、「ああ、行つてみよう」と答えました。女人人は、

「それでは案内あんないしますから、少しのあいだ目をつむついてください」といいました。男が目をつむると、女人人は男を背負せおつて水にもぐつたようで、しばらくすると、「ここがさかべつとうの浄土です」といいました。

目を開けると、そこは、今まで見たこともなければ聞いたこともないりつぱな御殿ごてんの中でした。おどろいてあたりを見まわしていると、大勢おおぜいの美しい女人人がいろいろなごちそを運んできました。男は喜んでお腹おはらいっぱい食べました。食事が終しゆくわると、女人たちは、こんどは、美しい舞まいを舞まつて見せてくれました。

毎日ごちそうを食べ、楽しく遊あそんでいるうちに月日がたち、ここに連れてきてくれたあとの女人人が、自分の婿むこになつてくれないかといいました。男は喜んでしようちしました。ゆめのように楽しい日を送つているうちに、子どもが生まれ、まごが生まれ、ひまごも生まれました。

ある日のこと、男は、ふと、ふるさとのことを思い出しました。

(おれは、屋根のふきかえの日に川原へ魚釣りに出たまま、こうやって長い年月を楽しく暮らしているけれど、家はどうなつただろう)

そう思うと矢もたてもたまらなくなりました。そこで、女人に、

「家のことが気になるので、いちど帰つて見てきたい。すまないが、もとの川原まで送つてくれないか」といいました。女の人は、

「そんなことなら、しかたがありません。送つてあげましょう」といつて、男を背負いました。

男が目をつむつているうちに、川原に着きました。見ると、釣りざおが置いてきたときのままになっています。急いで家に帰ると、屋根のふきかえのまつさくわらがまつ最中です。村の人たちが男に気づいて、

「もう帰つてきたのか。こんなに早く帰つてきたのでは、魚もたいして釣れなかつただろう」といいました。男は、何がなんだか分からなくて、ぽかんとしてしまいました。やつと氣を落ち着けて今までのことを話すと、みんなは、

「ふしきなこともあればあるものだなあ」といいましたとさ。

おしまい

\* さかべつとう 七、八月がつの日の出の前に、大群たいぐんをなして川面かわもをさかのぼる白いチヨウの一種いっしゅ。太陽たいようののぼるころには死んで川を流れながていくという。

\* 浄土 この世のすべての苦しみをはなれた安樂あんらくの世界せかい。極樂ごくらくのこと。仏教ぶつきょうのことば。

出典 『語りの森昔話集2ねむりねっこ』村上郁再話／語りの森